

「寫情小説恨海」における寫實法について

著者	宮内 保
著者別名	MIYAUCHI Tamotsu
雑誌名	漢文學會々報
巻	23
ページ	37-40
発行年	1964-06-25
URL	http://doi.org/10.15068/00148602

『寫情
小説 恨海』における寫實法について

宮 内 保

『寫情 恨海』全十回は一九〇五年、作者・吳沃堯（跼人・
小説 1866～1909）のたぶん第五作めとして着手され同年に單行
本の形で發表された。^(注1)物語そのものはさして複雑でない。

「張棣華は、早くから陳伯和の許嫁と定められ、ひたす
ら親の命のまま將來に望みをかけて成長してきた。十八歳
の年、義和團の亂を機に北京じゆうが不安に陥つた頃、二
人は五年ぶりに再會し、上海へ避難することになる。しか
し出發後三日めに、難民の群にまぎれこみ再び離散する。
以後の棣華は母と連立つて南下しつづけるが、その途中で
母とも死別するなど身心兩面からの苦痛にさいなまれる。
そうした中にも伯和への思慕の情が彼女を支えつづける。
こうして約二年後、彼女の前に現れた伯和はすっかり墮落
しきつていて、棣華の純愛を裏切つたまま病死してしまふ。
最後の望みを斷たれた棣華は、失意のうちに父と弟を捨て
て出家する。」

このほか、たとえば、陳鶯仲と王娟娟との悲戀とか、憂
國の清官であつた陳戟臨がかえつて義和團の手にかかるな
ど、いくつかの悲惨な場面もあるが、それらは全體からみ

てさほど重要とも思えぬので本稿では一應考慮の外におく
こととする。

以上のように、この作品は主人公・棣華の愛情が踏みこ
じられる悲劇をテーマにしているといつてよいかと思う。
その點ではたしかに寫情小説のだが、作者が譴責をもつ
て創作上のエネルギーとした作家であつてみれば、その底
流として譴責性の潜んでいることは争えない。^(注2)むろんそれ
は、通常の譴責小説に共通する傾向——作者の感情がむき
出しにされる——をもつてはいないし、また『痛史』『二十
年目睹之怪現狀』にみられるような啓蒙のくさみを帯びて
もない。さらには、『痛史』以來の跼人の作品——主とし
て歴史小説、社會・風俗小説と呼ばれる系列の——が、お
おむね客觀描寫の立場をとりながらも、講談の域からまだ
十分には脱しきつていなかつたの^(注3)に對して、『恨海』からは
この傾向がまつたく消え去つている。かかる意味からも、
この作品が近代小説への接近を見せているとするのは、強
引にすぎるのであらうか。

× × ×

断人の作品中にも、彼自身の感情を露骨にみせた作品がないではない。^(注4)しかしそれとても、同時代の他の作家たとえば李伯元や曾樸たちほどに激しくはない。というよりむしろ彼は、概して感情をおえる型の寡黙な作家であつて、^(注5)この性格は、『恨海』に至つてことに際立つている。それを見るために、われわれはまず、いくつかの引用（紙幅の關係上、すべて原文によることを諒承された）を追つてみよう。すべて、棣華が伯和に寄せる感情の動きを捉えたものである。

北京からの避難行のはじめ、十八歳の棣華は伯和に對して次のような恥じらいを感じる。『尙未成婚的夫妻、怎麼同在一個炕上睡起來？』^(A1) ついでそんな自分に、『被亂法所限、連他的病體如何、也不能親口問一聲』^(A2) 『偏又是這樣不上下的、有許多嫌疑。真是令人難熬』^(A3) と、もどかしさを感じ、やがて『索性各人自己投奔、兩不相見、不過多一分憾記、倒也罷了』^(A4) とまで考える。こうした表現の中に、當時の若い女の心理的起伏を鮮明にリアルに描こうとする作者の努力の迹を見ることは、無理な注文でもあるまい。

次に、伯和と離散してからの棣華の心理の一例をみると、たとえば、『他是一個弱書生、不要反爲了那些金銀、鬧出亂子來。此刻正在亂離之際、這件事第一耽心』^(B1) と考えただけで背に冷汗を感じる、と書かれている。そうして、

北京を出發したことにさえ、『倘使同在京裏、到了事急時、還可以相依、或不至散失』^(B2) と後悔している。つまりこの過程では、伯和への恥じらいが離散を経て後悔へ、それから思慕へと推移する心理が巧妙に捉えられて描かれているといえる。のみならず思慕の情は、次のような描寫を通してことさら強調されている。

母親を看病する合間に、『雖未成禮、今日奉了母命、先用了他的衾枕、或者是他日“同衾”之兆、也未可知』^(C1) と、そんな他愛もないことを考えている間に悲しさも忘れて、また、『將來成禮之後、如何恩愛、如何相敬』^(C2) と夢想にふけるのだつた。

しかしこの甘い夢も、天津の近く、義和團の行動を眼のあたりになると、たちまち現實へひき戻される。病身な母親のたまえ氣文を装つてはいるものの、心ではいつそう伯和のことがいとおしく、『此刻不知可在天津、倘在那裏、便不好了。怎能想個法子、知道他的下落、才可以放心呢』^(D1) と、ひとり悶悶とする。その様子はまた次のように描寫されている。『可憐這一寸芳心、又是憂母、又是念父、又是憶夫（伯和）、經了這三種折磨、加之金珠將盡、又多一層心焦、漸漸的也黃瘦了』^(D2)

以上、ごく大まかな引用だけから次のように結論するのはいささか牽引の謗を免かれないが、作者は終始きまこまかに棣華の心理を追求し、しかもそれをナチュラルな形で

表現する、つまり感情の動きに不自然さが生じないよう
との配憂を怠らないといつてよいかと思う。これを以上の
引用の範圍内でいえば、たとえば、引用(〇一)の部分^(註6)
挿入したことは、作者にとつて明らかな冒險なのだ、こ
れとてもこまかな計算の結果、敢行された冒險とみるこ
ができる。何故なら、引用(一)が天津という混亂の地を
背景にすることでリアリティを加えるのと同様に、引用(B
一)もまた、引用(一)のような地文、および引用(A
一)のような心理描寫との對比において、逆に若い女
の心理らしく現實味を加える効果をあげ得るからである。

× × ×

ところで、『恨海』の手法でもつとも目立つのは、この
ような楛華の心理描寫に適確なリアリティを附與すること
によつて、楛華の人物形象を行つてゐる點であろう。即ち
先のいくつかの引用からも想像できるように、楛華という
女は、きわめて繊細でひかえめな人物像として浮び上つて
くるのだが、作者は、ほぼこのような心理描寫を重ねなが
ら、讀者の腦裡に楛華の人物像を結ばせるべく技巧を凝し
てゐるのである。こうした手法は、むろん當時としても決
して多い例ではない。^(註7)そこで次にこの點について少しくふ
れてみたいと考える。

この作品が、從來の寫情小説の觀念からすれば異端に等
しい形式をもちこんでゐることは、早くから讀者の目を惹

いてゐた。^(註8)ところがそれはまた一方、寫情小説でありなが
ら結末においても悲劇の殘るこの物語を當時の讀者に納得
させるべく、その悲劇性を合理化するための手法を當然要
求する結果となつたであろう。また、もともと譴責を意圖
して書かれた筈のこの作品が、その生命線ともいへべき悲
劇性に合理性を缺くとすれば、露骨な教條主義に陥りかね
まい。そればかりか、作者の警戒した「牽引附會」「簡略
無味」にもなりかねない。こうした要求を満足させ、同時
に危險から逃れるために案出されたのが、寫實的な心理描
寫であり、かつそれを通しての人物形象だつたものではある
まいか。つまり、この手法によつてリアリティを強調する
ことは、それだけ物語から虚構性を薄めることにもなるか
らである。作者がいきおい寡黙とならざるを得なかつた所
以であろう。

この虚構性からの迴避を、より強力に進めるためであろ
う、作者はさらに次のようにして、楛華の心理を波立たせ
てゐる。『這都是我自已不好、處處避着嫌疑、不肯和他
說話。他是一個能體諒人的、見我避嫌、自然不肯來親近。
我若肯和他說話、他自然也樂得和我說話、就沒有事了。伯
和弟弟呀；這是我害了儂了；』伯和が墮落したこと責任
を、楛華は自分の身に負おうとするのである。むろんこれ
は見當ちがいな獨斷——自責である。そもそも、伯和が楛
華たちからはぐれたこと、天津で難澁したこと、或は上海

で身を滅ぼすことなど、どれひとつとして楛華に責任はない。にもかかわらず、作者はまるで無感情に、そうした楛華の見當ちがいからくる苦惱を寫しつづける。この傍觀的な寫實法が、物語に眞實味を加える上で有効な役割をになつてゐることはいうまでもない。そして最後に注目しておかねばならぬことは、以上のようにして、楛華の内面を寫しとつた上に、作者がもうひとつ寫實法の效用を發揮してゐることである。それは、この物語の背景である義和團の亂および亂によつて動搖する巷間の描寫に讀みとることができる。ここでその一例をみておくと、たとえば天津での亂の有様を、一楛華出到船頭、站起来擡頭一看、這一驚非同小可；只見遠遠的六、七個火頭、照得滿天通紅、直逼到船上的人臉上也有光影子。人聲嘈雜之中、還隱隱聽得遠遠哭喊之聲、不由得心頭小鹿亂撞。……(下略)と寫實風に描いてゐる。このような表現が、これまで見てきた引用とどのように絡みつくか、それはもはや述べるまでもあるまい。

以上から、われわれは、主人公・楛華の愛情の變遷を次のように圖式化することができる。「恥じらい↓(離別) ↓後悔↓思慕↓素朴な罪の意識↓自責↓思慕」そしてこの背景をなすものは混亂と不安に満ちた、義和團の亂當時の河北、山東地方である。かくてここに、『恨海』における寫

實法の二重性を見ることは無理ではあるまい。即ち、心理描寫と敘景という二つの對稱に純客觀の眼をそそぐことによつて生れた表現は、物語に十分な迫眞性をもたせると同時に虚構性をやわらげ、その結果、讀者の感情をゆり動かすことに成功したのである。

このことはやがて、譴責作家たる吳沃堯のめざした民智改良・啓蒙の可能性をさらに高めた反面、そのために楛華の中から「人間」を喪失させてしまうことになるのだが、この點については紙面の關係上、今は割愛せざるを得ない。

(注1) 着手年次に従つて記せば、『痛史』(全二七回・未完・一九〇三)、『二十年日賭之怪現狀』(全一〇八回・完・一九〇三)、『電術奇談』(全二四回・完・一九〇三)、『賭騙奇聞』(全八回・完・一九〇四)、『恨海』成立當時、完成してゐたのは後の二篇だけである。

(注2) 第一回の冒頭部、および第七回、第十回などから、譴責が、時の爲政者・義和團・中國人における「情」の觀念に及んでゐることが知れよう。またこの傍證としては野人自身の小説論をあげる事ができる。

(注3) 『痛史』『賭騙奇聞』などにおいては、「看官」なる讀者への呼びかけに始まる解釋・解説部がいく度か現れる。『二十年日賭之怪現狀』の場合それは一度しかないが、王纘之・文連農・王伯述などによる解説がその代役を行つてゐる。

(注4) 例えば『痛史』『情變』の冒頭参照。

(四十九頁下段へ)

鎌田教授 中國思想史演習（孟子集註）

〃 日本漢文學演習（文華秀麗集）

河野教授 中國言語學概論

牛島助教 中國言語學演習（老舍、全家福）

鈴木助教 中國文學概論

〃 中國文學演習（杜甫、律詩）

〃 中國文學演習（宋代古文）

陳講師 中國語學講讀（今古奇觀）

前野講師 中國文學史（宋代）

丸山講師 中國文學講義（魯迅）

小林（芳）講師 日本漢文學特講

四 大學院科目

内野教授 金文辭大系、淮南子講義

小林教授 王注老子講義

鎌田教授 春秋學講義

牛島助教 六朝文法講義

鈴木助教 唐詩の綜合的研究

○會員著書

一、鎌田 正著「左傳の成立と其の展開」（昭三八・三）
（大修館刊）

一、加賀榮治著「中國古典解釋史・魏晉篇」（昭三九・三）
（勁草書房刊）

（四十頁下段より続く）

（注5）『怪現狀』發財秘訣』などがあげられよう。なおこの點に

ついては、中野美代子『清末小説研究・その四・吳趸人ノオ

ト』北海道大學外國語・外國文學研究Ⅷ（一九六〇）がある。

（注6）『恨海』第一回到「中國で「情」といわれるのは「痴」ないし

「魔」とよぶべきもので、眞の「情」は忠・孝・慈・義などと

なるものである」として、更に、『俗人但知兒女之情、是情、

未免把這個「情」字看的太輕了。並且有許多寫情小説、竟然不

是寫情、是在那裏寫魔。寫了魔、還要說是寫情。眞是筆端罪

過』といつてゐる。

（注7）例えば、『恨海』と同年に發表（二十回のみ）された曾樸

『孽海花』においても、すべて外觀によつて人物を描いてゐる。

（注8）『新厂』（周桂笙）は『蓋寫情小説、大抵總不出「悲歡離合」

四字。今是篇……（中略）……有悲無歡、有離無合』と評して

いるその他、報癖による評或は『觚菴漫筆』の評などがある。

（注9）『吳趸人』兩晉演義』序に、『夫蹈虛附會、誠小説所不能免

者、然既蹈虛附會矣、而仍不免失於簡略無味、人亦何貴有此小

説也、人亦何樂此小説也』という。（大學院修士課程）